

新史太閤記

映画文学人生論

司馬遼太郎 (1923-96)

『新史太閤記』 (1968) 「新潮社」

参考：『甫庵太閤記』 (1626) 小瀬甫庵

『真書太閤記』 (江戸時代後期7) 栗原柳庵

『絵本太閤記』 (1797-1802) 武内確斎

この猿ほど人を殺すのをいやがった男もめ
ずらしい

『太閤記』は百姓の生まれながら太閤と呼ばれる天下人になりあがった英雄豊臣秀吉の伝記である。江戸時代初期からさまざまな異本が流布しているが、その中であって司馬遼太郎の『新史太閤記』は、わざわざ新史とことわっているように、新しい史観（司馬史観）にもとづいている。

どこが新しいかというと、たとえば、『甫庵太閤記』によれば、蜂須賀小六は夜盗であり、『真書太閤記』にはこの当時無かつたはずの三河矢作大橋の上で、夜盗稼ぎの帰りの小六と藤吉郎が会い、『絵本太閤記』ではこれを劇的な構図に仕立てあげたという。

私が小学生のころ、読んだ少年向けの太閤記もその劇的な構図だったと記憶している。

それに対して、司馬史観の『新史太閤記』では奴隸、物乞い同然の暮らしを送っていた藤吉郎が尾張海東郡蜂須賀村の蜂須賀屋敷で十五の齢を迎えたことになっている。矢作大橋で小六と遭遇する劇的な場面はない。

屋敷の主人は夜盗ではない。が、似たような稼業をしている。いざ合戦があるといえば、勝ち目のありそうなほうに駆けつけて名を台帳に載せてもらい、槍働きをする。いわば野伏（のぶせり）だが、多少の田地があつて、村に定住しているから、厳密には夜盗、野伏とはいえない。



新史太閤記

映画文学人生論

司馬史観の例をもう一つあげると、「この猿ほど人を殺すのをいやがった男はいない」という見方である。若い頃の秀吉は猿と呼ばれていた。天下取りをめざす織田信長の下で戦にあけてくれている、人を殺さざるをえない。それをいやがっていたら出世できないはずだが、猿は戦闘よりも調略によって敵に勝つことを好んだという。

たしかに、猿と呼ばれていたころの秀吉は人を殺していない。千利休や甥の秀次を切腹させ、秀次の妻妾三十九人を三条河原で処刑し、文禄・慶安の役では多数の日本人と朝鮮人を殺したが、それは天下人となって、誰からも猿とは呼ばれなくなつてからのことである。

『新史太閤記』は、猿が天下人になったところで終わっている。したがって、読者は千利休の死も三条河原の処刑も文禄・慶安の役での大量殺人も知らないままですむ。

秀吉の辞世は、「どうやら自作であるらしい」と司馬遼太郎はいう。「かれ（秀吉）はもともと歌才のようなものがあり、若いころは狂歌じみたものを詠んだが、天下を得て公家仲間とつきあうようになつてから多少の物習いをし、歌じみたものをつくつた。辞世にはかれの地肌ともいふべき狂歌のにおいがにじみ出ている」。

露と置き露と消えぬるわが身かな

浪華のことは夢のまた夢

秀吉